学苑　No. 965　(84)～(87)（2021・3）

研　究　余　滴〈エッセイ〉

キキはなぜ黒いワンピースを着るのか

スタジオジブリとファッション

菊　田　琢　也

1. はじめに

『天空の城ラピュタ』(1986) の序盤，シータが空から降ってくる。彼女は紺色のワンピースを着ている。途中，飛行石のペンダントから眩い光が発せられ，落下速度は減速する。ゆるやかに揺れるスカートが，その速度の変化を視聴者に伝える。ゆっくりと下降するシータ。それに気付いたパズーは駆け寄り，彼女を受け止めるべく手を広げる。彼は袖を捲ったスタンドカラーシャツにベスト，ズボンという装いだ。右膝には補修した跡がある。さて，私たちは2人の服装から，どのようなことを読み取ることができるだろうか。性別，職業，身分，性格，趣味，境遇…。

私たちは服装や外見から，その人物が何者であるかを推察する。他者の内面を見ることはできないので――自分の内面も分からないことばかりで困ったものではあるが，外見や言動からその人について知ろうと努める。あの人はどんな人で，どんな生活をし，どのような趣味や思想を持っているのだろうかと，着ている服などから思いをめぐらせる。ファッション――ひとまず，服や化粧などで身体を装う行為に関することとしておく，は他者の他者性 (otherness) を理解する上で重要な役割を担っている。

スタジオジブリの作品に登場する人物たちの装いをめぐって，ファッションとは何かについて考えてみたい。

2. 月島雫の装い

私たちはいろんな服を着て，自分の身体を装って，日常を生きている。いつも同じ服を着ているわけではなく，毎日のように取り替え，装っている。一日に何度も服を着替えることもある。日本には「TPO」という和製英語があるが，時間 (Time)，空間 (Place)，場面 (Occasion) といったものに服装は左右され，その意味が規定される。そこに，感情 (Feelings) というものを加えることもできよう。

『耳をすませば』(1995) は，中学3年生の月島雫の日常を描いた作品である。読書好きの雫は，同い年の男の子，天沢聖司との出会いをきっかけに，小説家になる夢と真剣に向き合うことを決意する。

劇中，雫は様々な服を着て登場する。寝間着，部屋着，外出着，学生服…実に多様である。これらの服装を規定しているのは公私の空間性によるところが大きい。例えば，学校などの社会的な空間 (social space) では，学生服のようにその場の規律に合わせて身なりを整えるが，他方，自宅など家族以外の視線にあまり晒されない私的な空間 (private space) では，くだけた格好で過ごす。

しかし，私的／社会的な空間の線引きは必ずしも厳密に存在するわけではない。例えば，雫は部屋着のままコンビニに出掛け，夜の公園で親友に会い，その格好のまま寝てしまったりもする。この場合，部屋着・外出着・寝間着の区別は曖昧である。しかし，その格好で出掛けられる範囲や会える相手は人によって異なるだろう。例えば，雫はその姿で意中の人，天沢聖司に会うことはできるだろうか。

このようにファッションとは私的な行為であると同時に社会的な行為である。ファッションのこうした特性について，イギリスの社会学者であるジョアン・エントウィスルは「situated bodily practice (状況被拘束的身体的実践)」(Entwistle 2000＝2005) という概念で説明している。時間や空間，場面，相手，あるいは感情に応じて私たちの装いは選択され，その意味もまた規定されていく。逆を言えば，時間や空間，場面などが変化すれば，装いの意味もまた変化するということである。つまり，ファッションとは特定の状況下において服や装いを規定し，それらを意味付けするシステムであると言えよう。

3. ハレとケとファッション

前節で，『耳をすませば』は雫の日常を描いた作品だと述べたが，ふとした瞬間，日常が非日常 (ファンタジー) へと接続される。日常と非日常が隣り合わせにある。

特に印象的なのは，雫が執筆する小説，猫男爵のバロンの物語の世界に迷い込む場面だ。下校途中，小説の続きを想像する雫。次の瞬間，世界が切り変わる。それと同時に，雫の装いはヴィクトリア朝のドレスへと変貌する。

私たちは，結婚式や成人式，卒業式など特別な日に晴れ着を着る。いつもより着飾った装いをし，身なりを整える。すると，いつもと違う自分になったかのような，自分が主人公になったかのような気持ちになる。あるいはハロウィンなどでコスプレをした際，自分ではない何者かに変身したような気持ちになったことはないだろうか。私たちの日常にはこうしたハレとケ――非日常と日常が存在し，大き

なものから些細なものまで含めて，それに合わせてドレスアップやドレスダウンを繰り返している。

このようにファッションは，私たちの外見のみならず，内面をも変える力がある。私たちは服とともに成長し，自己を更新しながら，日々を生きていると言えよう。

4. キキ，身支度をする

『魔女の宅急便』(1989) もまた，服装をめぐる描写がとても多い作品である。魔女の家系に生まれたキキは，古くからのしきたり――魔女として生きることを決意した少女は，13 歳の満月の夜に魔女のいない町を見つけて定住し，魔女の修行を積むべし，にならって，黒猫のジジを引き連れて一人旅立つ。親元を離れて，一人暮らしを始めるのだ。その旅立ちの日の夜，母コキリと一緒に鏡の前で身支度をするキキであるが，魔女の制服である黒いワンピースがあまりお気に召さない。

キキ　：せめてコスモス色ならいいのにね。
コキリ：昔から魔女の服はこう決まってるのよ。
キキ　：黒猫に黒服で，まっ黒クロだわ。
コキリ：キキ，そんなに形にこだわらないの。大切なのは心よ。
キキ　：分かってるわ，心のほうは任せといて。お見せできなくて残念だわ。
コキリ：そして，いつも笑顔を忘れずにね。

私たちは朝起きて，学校や会社に出掛ける前に「身支度」をする。鏡の前で，髪型を整え，化粧を施す。部屋着から外出着に着替え，身なりを整える。そうすることで，私的な空間から社会的な空間へと移動する準備をしている。身支度とは，外見を整えることで〈わたし〉を社会的な空間に適応させる行為――身体を社会化（socialization）させる行為として捉えることができるだろう。

また，身支度とは自己を確認する行為でもある。鏡に映った，まさに「いま－ここ」にいる自分と向かい合い，現在の〈わたし〉を確認する。化粧をしたり，外見を整えたりすることを通じて，日々刻々と変わりゆく自身の身体や気持ちを確かめていく，とても重要な役割を担っている。身支度もまた私的な行為であると同時に社会的な行為であり，ファッションが大きく関わっている。

キキもまたその準備をしている。生まれ育った村を離れ，自分のことを誰も知らない社会に移り住むための身支度である。ここで，例えば中学の制服に初めて袖を通したときの体験を思い出してほしい。身体も気持ちも落ち着かず，そわそわとした居心地の悪さを感じたりはしなかっただろうか。しかしそれもまた，何回か着ていくうちに次第に馴染んできて，自分が中学生であるという自覚が芽生えてくる。社会的自我が形成されていくのである。キキにとっての黒いワンピースも同じようなもので，精神的にも身体的にもまだ馴染まないから，お気に召さないのである。

『魔女の宅急便』は，鏡像としての自分と繰り返し対峙する物語である。冒頭の鏡に向かって身支度をする場面はそこのことを示唆していると言えよう。劇中，キキを映し出す鏡のような存在が繰り返し登場する。それは鏡であったり，建物の窓ガラスであったり，それからキキが出会うコリコの街の住人であったり。黒猫のジジもまたその一つである。キキはジジに語りかけることで，〈わたし〉に語りかけ，自分の気持ちを確認しているのだ。

アメリカの社会学者であるチャールズ・ホートン・クーリー（Cooley 1909＝1970: 34）は，「鏡に映った自我（looking-glass self）」という概念を用いて，社会的自我の形成について説明している。

> 人間は自分の顔や姿を直接見ることはできないが，鏡に映すことによって具体的に知ることができる。それと同じように，人間の自我は他者を鏡として，「鏡としての他者」を通じて知ることができる。親，友達，先輩，先生が自分をどう見るか，どう評価するか，そのことを知ることで自分を知ることができるようになる。

キキは社会に出ることで，様々な年齢の女性たちと出会う。先輩魔女，同年代の女の子，年上の友人ウルスラ，ファッションデザイナーの女性，出産間近のおソノ，乳母車を押す女性，老婦人など。キキは彼女たちを「鏡」として，現在の〈わたし〉を確認し，これから自分が成長していく姿を徐々に具現化させていくのである。

5. キキはなぜ黒いワンピースを着るのか

「もうちょっと素敵な服ならよかったのにね」。

コリコの街で買い物に出掛けたキキが，途中，すれ違う女性たちのおしゃれな格好と，果物屋のショーウィンドウに映る自身の姿とを見比べて，ぼそっと呟く。『魔女の宅急便』を初めて観たのは小学生の頃だったか，中学生の頃だったか，その記憶は定かではないが，そう呟いたときのキキの何とも寂しそうな表情に居た堪れない気持ちになったことを，今でも鮮明に覚えている。それは，私自身も同じような思いを何度となく味わったことがあるからだろう。

私たちは毎日，当たり前のように服を着るという行為を繰り返しているわけだが，実のところこれがなかなか難しい。うまくいかないということが度々ある。この服は自分に合っているだろうか，着こなし方，合わせ方はおかしくないだろうか，場違いな格好で周りから浮いてはいないだ

ろうか，これはおしゃれなのだろうか。私たちは，ときに服装を間違えたと思う。そうしたときは，キキのような気持ちになり，自信をなくす。服装だけでなく，自分という存在が間違っているような気になってしまったりもする。

さて，前述のセリフの場面で，キキは自分と同年代の3人の女の子たちとすれ違う。彼女たちはいろんなアイテム，いろんな色をうまく組み合わせ，とてもおしゃれに見える。彼女たちの装いには「流行」という記号――コリコの街の時間性と空間性が反映されており，景観に馴染んでいる。対照的に，黒いワンピース姿のキキはコリコの街から浮いており，適応できていない印象を受ける。

続く場面では，ショーウィンドウに繰り返しキキの姿が映り込み，キキが自分の外見に意識が向いていることが暗示される。その後，スーパーマーケットで買い物を終えたキキがガラス扉を押して外へ出ようとすると，身なりの良い女性とすれ違う。ここでも，服装の差異が強調される。さらにその次の場面で，ブティックのショーウィンドウに飾られた赤いヒールや手袋，バッグを眺めて，キキは「素敵ね」と呟く。おしゃれなものに惹かれるキキの心情が端的に表現された場面である。しかし，キキとおしゃれなものの間はガラス窓によって遮られており，ただ傍観するしかない未来を暗示している。

こうした対比は，劇中において幾度となく繰り返される。例えば，箒で空を飛んで配達をする宅急便の仕事を始めたキキは，老婦人からカボチャとニシンのパイを孫娘に届けてほしいという依頼を受ける。配達の途中で豪雨に降られるが，何とか配達先にたどり着く。しかし，玄関先で対応する孫娘の反応は冷ややかである。

キキ：お届けものです。
孫娘：まあ，ずぶ濡れじゃない。
キキ：でも，お料理は大丈夫です。
孫娘：だからいらないって言ったのよ。
キキ：受け取りにサインをお願いします。
孫娘：私，このパイ嫌いなのよね。

このやりとりからも，2人が交わっていない様子が分かる。2人が位置する場所も対照的である。孫娘は灯りに照らされた明るい室内に立ち，他方，キキがいる玄関先は灯りが届かず薄暗い。明るいピンク色のドレスで着飾った孫娘と，雨でびしょ濡れのキキ。ここでもまた，キキの服装が場違いである様子が強調される。

同作の監督を務めた宮崎駿は，映画公開時のインタビューで，キキの黒いワンピースという設定について次のような説明をしている（スタジオジブリ編 2013：122）。

どうしてキキが黒い服を着るのか。自分なりに考え出した結論は，あの魔女の黒い服は，むかしからのいい伝えでそうなっているからだけじゃないんです。黒い服は，もっともそまつな服を着ているという意味だと思うんです。いちばんそまつな服を着て，着かざったりしないで，ありのままの自分の姿で，自分の世界を見つけに行く。それが魔女の修行なんだと思う。

ここで言う「そまつな服」とは，社会的記号が書き込まれていない状態の服として捉えることができるだろう。前節で身体の社会化ということについて触れたが，私たちは服を着るという行為を通じて，身体の表面に社会的な記号を書き込み，社会への適応を図っている。服は「第二の皮膚」であるとしばしば言われるが，社会的記号を書き込むメディアとしての役割がある。つまり，キキが着る黒いワンピースは，キキがコリコの街という社会にどのように適応し，社会的自我を形成していくのかという自己形成の物語を象徴していると言うことができるだろう。

6. ジェンダーを着る／脱ぐ

私たちは，服を着ることを通じて，社会的記号を身体に書き込む。ジェンダー，エスニシティ，ネイション，宗教，職業，所属，流行…。そうすることで，〈わたし〉が誰であるかを他者に表示し，自己を社会へと位置付ける。自己形成のことを英語で「self-fashioning」と言うが，私たちはファッションを通じて，自己（self）を形づくる（fashion）のである。ここでは，ジェンダーという社会的記号を着るということを考えてみたい。

『崖の上のポニョ』（2008）のポニョは，さかなの女の子。海の中で暮らしている。人間の男の子である宗介と出会い，地上で共に生きることを，人間として生きることを望む。さて，ポニョは赤い色のワンピースを着ており，宗介は黄色いTシャツに黒色の半ズボンという格好だ。2人の服装の差異に，ステレオタイプなジェンダーイメージをひとまず指摘することができるだろう。

社会にはジェンダーイメージが存在する。例えばトイレのピクトグラムは，男性はズボン，女性はスカートのシルエットをしている。また，青色と赤色で描き分けられている場合も多い。LGBTsなど性の多様性が広く謳われるようになった昨今においても，そうしたジェンダーによる服装の差異というのはいろんなところで見られる。もちろんそのイメージを身につけるか否かは人それぞれである。

『崖の上のポニョ』で興味深いのは，そうしたジェンダーイメージをなぞりつつも，ズラされているところだ。宗介が通うこども園において，カレンとクミコという2人の

女の子が登場する。カレンは全身ピンク色の装いで，ズボンをロールアップして穿いている。他方，クミコは水色のワンピースに白いハーフパンツを合わせている。従来女の子らしいとされていた服装を微妙にズラしたような格好である。

また，この2人に宗介が加わると，ピンク，水色，黄色という組み合わせになるが，この3色は，赤ちゃん向け製品のカラーバリエーションを想起させる。女の子にはピンク，男の子には水色，性別が分からない場合には黄色の服や小物を贈るとされているが，さて，宗介が着る黄色に，男性／女性という二分法に収まらないジェンダー意識を見ることはできないだろうか。事実，宗介の母であるリサは，宗介に自分のことを「リサ」と呼び捨てで呼ばせている。母と子という間柄においても，互いを自立した一個人として向き合おうとする様子が窺える。

私たちは，服を着たり化粧をしたりすることでジェンダーイメージを身につける。その一方で，脱ぎ捨てたり，隠したり，偽ったり，演じたり，ズラしたりすることもできる。ファッションのそうした実践は，ときとして社会への抵抗として機能する。

『かぐや姫の物語』(2013) では，かぐや姫（高貴の姫君）が桃色の着物を着る／脱ぐという場面が繰り返し登場する。桃色の着物は，竹取の翁が天から授かったものの一つであるが，「この衣にふさわしい暮らしを姫にさせよ。高貴の姫君に育てよ。そう天がお命じになっている」と翁は悟り，かぐや姫に裕福な生活環境と教育を用意する。かくして，かぐや姫は規範的な女性として育てられる。

公家の習慣にならって眉を剃られそうになるかぐや姫は，強く抵抗する。「ばかみたい！　高貴な姫君だって汗をかくし，ときにはゲラゲラ笑いたいことだってあるはずよ。涙が止まらないことだって，怒鳴りたくなることだってあるわ。高貴の姫君は人ではないのね」。かぐや姫は高貴の姫君＝規範的な女性として生きたいのではない。人間として，自由に生きたいのである。

裳着――今日で言う成人式の場面がある。その儀式の際，かぐや姫は幾重もの着物を女官たちから着せられる。その一枚一枚がジェンダーの記号を社会から着せられているようだ。その窮屈さに耐え切れなくなったかぐや姫は，三日三晩続く宴から逃げ出す。着せられた服を脱ぎ捨て，生まれ育った地，ありのままの自分に戻るべく疾走する。

桃色の着物は，女性性を表している。それを着たり脱いだり，自分の代わりに女官に着せたり，纏い踊ったりする場面は，かぐや姫がジェンダーをめぐって葛藤する様子を描いていると言えよう。女になったり，女を脱いだり，女を演じたり，偽ったり，女であることを戸惑ったり，あるいは悦んだり…。ファッションとジェンダーは密接に結びつき，切っても切り離せない関係がある。

7. おわりに

「Clothes make the man.」という英語のことわざがある。シェイクスピアの戯曲『ハムレット』の台詞が由来とされるが，「身なりは人を表す」という意味である。もしくは，「身なりが人を形成する」というふうに捉えることもできるだろう。私たちは服を着たり，自分の外見を装ったりすることを通じて，〈わたし〉とは誰かを認識し，あるいは他者から認識される。ファッションとは私的な行為であると同時に社会的な行為であり，自己に向けられた行為であると同時に他者に向けられた行為である。日々何気なく繰り返している服を着る，身体を装うという行為を通じて，私たちは自己を確認し，自分が生きる時代や社会，触れ合う人々とのバランスを保っているのである。

なお本稿は，2020年9月29日に昭和女子大学附属校4・5年生を対象に実施した体験授業での講義が元になっている。コロナ禍において対面での授業がままならないなか，80人以上もの生徒たちが参加してくれて，改めて授業をすることの悦びを実感した次第だ。これからもファッションの魅力について，より多くの方々に伝えることができるのなら，本望である。

文　献

Entwistle, Joanne. (2000): *The Fashioned Body: Fashion, Dress and Modern Social Theory*, Polity Press. ジョアン・エントウィスル，『ファッションと身体』，鈴木信雄監訳，日本経済評論社，2005年.

Cooley, C. H. (1909): *Social Organization*, Schocken Books. C. H. クーリー，『社会組織論』，大橋幸・菊池美代志訳，青木書店，1970年.

スタジオジブリ編，『ジブリの教科書5 魔女の宅急便』，文春文庫，2013年.

（きくた　たくや　　環境デザイン学科）